

窪川鶴次郎(1903-2-25~1974-6-15) 文芸評論家、詩人、小説家。香川県生まれ。香川の第四高等学校を中退して上京。同輩だった中野重治と再会し、雑誌『雑』とともに同人誌『鶴尾』を創刊して、詩や小説を発表。その頃知り合った田島いね子(後の窪川いね子、佐多稲子)と結婚。30年、全日本無産者芸術団体協議会の機関誌『ナッパ』の編集に携わり、評論を書き始める。戦後は『新日本文学』の創刊にかかわるが、次第に短歌研究への関心を深め、文学の現場からは離れていく。代表作に『現代文学論』『再説現代文学論』『石川啄木』などがある。

窪川鶴次郎 東

kubokawa tsurujiro

散 歩 道 の 京

戦災から復興を遂げ、明治百年を目前に沸き立つ東京。変貌していく街並みの背後に静かにたたずむ遺構や、明治・大正期の文豪ゆかりの地、作品の舞台を訪ねて、その日の面影を浮かび上がらせた、街歩きのための絶好の案内書。昭和初期を代表する文芸評論家が描く、修業時代の体験を元にした作家たちのエピソードや、市井の人々の話にはドキュメンタリーの魅力が横溢。

講談社文芸文庫

Kōdansha Bungai bunko



この影のこす昭和の東京。人々の暮らしが織りなす街の風景。

講談社文芸文庫
Kōdansha Bungai bunko



創刊30周年

昭和の風景を
描いた名著

講談社
Y1900
文芸文庫



勝又浩
高度経済成長による開発の波が、まさに津波のように街の姿を変えつつあるなかで、この「散歩」がなされ、景色が描かれたわけだ。確かめてはいないが、いま東京湾・隅田川の名物となっている屋形船は、この舟宿の人たちの生き延びた新時代の姿ではないだろうか。こんなふうにこの本は、その後急激に消えてしまった「明治・大正」の最後の「おもかげ」を際どいところで描き、伝え残してくれたのである。

「解説」より

東京の散歩道

目次

第一の歩道 本郷から上野にいたる道

- 一 散歩のはじめに 九
- 二 本郷かいわい 一三
- 三 無縁坂 二〇
- 四 湯島天神 二四
- 五 上野公園にて 二五
- 六 上野の山 二五

第二の歩道 上野千駄木町から団子坂をのぼる道

- 一 根津かいわい 二六
- 二 団子坂 二七
- 三 吹上坂 二〇八

第三の歩道 谷中と根岸をめぐる静寂な道

- 一 谷中霊園 二二二
- 二 笠森稲荷 二三二
- 三 根岸の里 二三五
- 四 入谷 二四三
- 五 三つの市 二四八

第四の歩道 下町の趣にひたる道と路地

- 一 浅草 二六〇
- 二 隅田川畔 二七八
- 三 山谷付近 二九二

- 四 吉原かいわい 二九九

- 五 日本堤 三一九

第五の歩道 江戸ざかいは今は昔の街道

- 一 南千住から 三三四
- 二 千住今昔物語 三三七
- 三 旧奥州街道 三四九
- 四 荒川土手 三六一

第六の歩道 伝統のおもかげを追憶する漫歩道

- 一 向島百花園 三六五
- 二 木場 三六九
- 三 堀切菖蒲園 三七四
- 四 田端の駅 三七七

- 五 飛鳥山 三八〇

- 六 はとバス 三八五

- あとがき 三九〇

解説

勝又浩 三九三